

神奈川文芸賞 [2024]

1

アンコールの曲が終わると、源カリンはむすっとした表情で、そそくさと楽屋へ下がった。楽屋のソファにもたれ、退屈そうに天井を眺めていると、本日の主役である源原ルルがカリンのそばに座る。「今日どうする？ 志村君が登戸にいいお店あるから、これからそこ行って話なんだけど」。ルルは今日のカリンの演奏の出来には何一つ触れないで言った。「んー、私はパス」。カリンはほつと天井を見つめながら言った。

新百合ヶ丘駅から歩いて十分ほどのところに、ジャズクラブ「ヒューイット」はある。ひっそりとした場所にあるこじんまりとしたジャズクラブで、古くからのファンも多い。そのジャズクラブの入り口から、ギターのハードケースを持ったカリンが出てくる。やや重い扉の横に黒いボードがあり、白字で今日のメンバーが書いてある。

源原ルル (P)
横井純 (Bs)
志村隆 (Dr)
源カリン (Gt)

そのボードの中に、取ってつけたように書いてある自分の名前を見て、思わずカリンは下唇を噛む。噛んでそのまま歩きはじめ、思い出したくもない今日の演奏を思い返してしまう。

正直に言えば、今日のメンバーは、今のカリンの技量からするともったいないくらいで、事実、カリン以外の三人は普段から「源原ルルトリオ」として活動している上に、ジャズファンからの評価もなかなか高い。「若いのに玄人好みの堅実なジャズをや」という風。

そんな若手注目トリオのリーダーである源原ルルは、音大時代からのカリンの親友であって、ときどき、自分のライブでギターを弾いてくれと、ゲスト出演のオファーをカリンに出す。

源カリンと源原ルルは今年で二十八になる。今や源原ルルはボストン帰りの新鋭として、着実に自分のキャリアを築きはじめている。音大を卒業してすぐさまアメリカに渡り、それから四年間磨き上げてきた彼女の實力はだれがどう見ても、申し分ない。

対して、源カリンはといえば、ふらふらと自分のグループを持たずに、時々、知り合いから声がかかれば、あくまでゲストの立場で、その日限りのライブに参加する程度であって、カリン自身も自分のことをジャズミュージシャンと名乗っていないものか、いまいぢわらないでいる。何度かギター教室で教えてみないかという話ももらったが、「私は人に教えられるほど親切でもないし、愛想も良くないしな」と。「あ、はーらいの考えで、その誘いも断ってしまっている」。

「じゃあアンコールは『ミスティ』で」。ルルは、

袖からステージに出る前、メンバーに向かって言った。「お、いいね。最後はゆったりしめしますか」。ルルたちより二つ上のベシストの横井は言った。

「そんなら、おれ、ブラシだけ持って〜」とドラムの志村は言って、スティックケースからブラシだけを抜いて、ケースは袖にある台の上に置いた。カリンは一瞬だけ眉をひそめ、それから何事にも無関心に見えるいつもの表情に戻った。正直、カリンは「ミスティ」という曲が苦手だった。テンポがゆるゆると、ソロをとるとなると、まさに霧のようにとらえどころがなく、なんだか居心地の悪い思いをさせている間に曲が終わっている。「この曲にギターの入る余地なんてないんじゃないか」とすら、彼女は思う。

そして、事実、源原ルルトリオの『ミスティ』はしっとりとしていて、きらびやかなピアノのタッチが心地よく、すでに完成されていた。カリンは「自分がなにをやっても邪魔になるだけだろ」と思いながら、なるべくウォーリウムをしぼり、ロケットのコードを添えるくらいに、無難な演奏をした。そして自分にまわってきたソロの出来はひどいものだった。

別にカリンは満足な演奏ができなかったからといって、過度に落ち込むような性格ではなくなっている。それでも、心の中にモヤモヤとするものはある。駅までの人気がない道を歩くカリンは、足を止め、空を見上げる。ぼんやりと鈍く光る月には、雲がかかっている。「今夜は一人でいたくないな」と彼女は思い、スマホを取り出して、画面の光をつけた。

カリンには、四つ年上で三十二歳の圭祐という彼氏がいる。彼はカリンが実家の喫茶店を手伝っているときに、声をかけてきた男だった。カウンターの後ろで、カリンがコーヒーを淹れている。深煎りの豆をマシンで砕き、ネルに入れ、そこにポットを傾ける。一連の流れを、カリンは喫茶店のマスターである父親から習った。もちろん、店にはジャズが流れている。古いJBLのスピーカーに、ピクチャーのターンテーブル。

ゆっくり田を描きながら、お湯を注いでいると、カウンターの奥にやら視線を感じる。顔を上げる。男がカリンの手元をじっと見つめている。「なにか？」。なんだか落ち着かなくなったカリンがむすっとした顔で言った。

カリンの父親がやっている「源コーヒー」は北北の駅から歩いて十分ほどあり、客層は落着いていて、常連が多い。そして、うまい深煎りを出すところとして評判がある。そういう場所だからこそ、カリンの「愛想の悪い」も、そこでは受け入れられる。

「あ、いや、なんかいいなって思って」。カウンターの座っている男は、はにかんでそう言った。それが圭祐とカリンの出会いだった。圭祐はそれから「源コーヒー」に通うようになり、空いていれば同じ席に座って、カリンに話しかけた。

カリンに言い寄ってくる男は、少ないわけではない。若い女がジャズをやっている、というだけでも、寄ってくる男は一定数いる。そしてカリンはその手の男たちが嫌いだ。彼らは望んでもないのに、カリンにジャズを教えたがる。「あのレコードは聴くべきだ」とか、「一度はニューヨークのどこぞのクラブに行かなきゃだめだ」とか。

小説部門：準大賞
Misty / 奥間空



イラスト / 鈴木美古都(県立相模原弥栄高校美術部1年)

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。入賞作品は順次掲載します。次回は11日の予定です。

圭祐は、その能力を活かして代々木上原でシーシャバーをやっている。そういう場所に来た〜興味がないカリンは、これまでシーシャバーに行ったことがない。ないけれども、そういう場所に行きたい人間が集まるかという、半ば偏見混じりの知識はある。それもあって、カリンはそこには行きたくないし、そこに行くような人間とは絶対に仲良くなれそうにないとも思う。

夜遅くまで接客業を営んでいて、交友関係も広い圭祐のことを考えると、カリンは「この人に本気になる必要はないんだ」と、心のどこかで安心したりもする。それを見て、「そもそも自分がなにかに本気になったことなんてあったらどうか」とも考える。ジャズだって、環境があつて、なんだと、で始めて、なんだと、でここまで続いている。

「なんだとなく」といえば圭祐と付き合ったのだった。なんだとなく、みだいなんで、私たちに、「この先、ってないんだろ」とと普段、カリンは思っている。

スマホに圭祐からのメッセージは来ていない。「さういって送ってこいよ」とカリンは思う。そして、今抱えているモヤモヤをどう処理していいかわからないカリンは、そのまま本気でない圭祐に会いに行きたいと思ってしまう。けれども、「せせせせ店だろ」とか「結論を先取りして自分からメッセージを送ることはしない。さみしいときに素直に」会いたい」と言ったり、会う約束、をすつて会いに行く、ということができないのが源カリンという人間なのだ。

結局、カリンはもまばらな新百合ヶ丘駅の改札を通り抜け、小田急線に乗って下北沢にある家まで帰った。その間、頭の中には霧が立ち込め、まるでカリンの自我が気化したかのようなその霧は、「私

はこの先どうなるんだろう」と、ぼんやりとした言葉を感じてしまった。

2

翌日、カリンは「源コーヒー」のカウンターの奥で、ネルにポットを傾け、コーヒーを淹れていた。元々、その日は休むと父親に告げていたが、カリンは店に出た。

昨日の夕方、圭祐は、「ライブの次の日だし、明日は一日中ちびでるころしてよかかな」とかいいに考えていたが、思ひのほか早くに目が覚めてしまつて、その上、ベッドで、ちびでるにしても、昨日の余韻なのか、余計な考えばかり浮かんでくる。「映画でも観たい」とか「調子悪くないか」とか、気になるものはやっとなさげに、一瞬、圭祐のことが頭に浮かんだが、「もう人と会いたいって気分でもない」となると、他に気を紛らわせる方法が出てこなかったカリンは、「だったら店出るか」で、店に出ることにした。

自分の部屋を出て、キッチンへ行き、六枚切りの食パンを一枚取って、トースターで焼き色をつける。いつもより厚めに切ったバターをその上にのせ、さつと食べる。それから諸々の支度をすませ、一階の喫茶店へと、彼女は降りる。

「あれ？ 今日出るの？」と、降りてきたカリンの顔を見て彼女の父親は言う。「うん」とだけ言って、それに対しカリンは、「うん」とだけ言って、自分の持ち場へ向かう。

父親はそれを受け入れ、彼女が通れるように、カウンターの奥に二歩後ろに下がった。カリンは「源コーヒー」では、基本的に接客はせず、黙々と、注文が入ったコーヒーをつくったり、洗った物を取り替えている。そして、今朝のような精神状態の日は、部屋の中でもないはずにいると、自分の中に響く、余計な一般論を語ってくる自分の声だけがどんと大きく響いて、自分が自分の中で窮屈になってしまつて、けれども、仕事という名目がある、手を動かしてさえいれば、その声だけに煩わされることもなくなる。

「カリンちゃんはエライねえ」ふと、カウンターの奥から声がして、顔を上げると、常連の紳士が、かわいい孫を見守るおじいさんのような表情をしていた。「え……」と現実の空間に戻るための間を取って、それから続ける。「全然ですよ。この年になってもまだ、さういっている」

すると紳士は自ら尻にシワをつくり、なんだか嬉しそうに顔を笑した。「ええ？ そうかい？ でもやっぱエライよ。さういっててもおれたちにならなコーヒー、さういってられるんだから」。「さうですかね」とカリン。「そう、さう」と相手は返してくれる。カリンは、唇を甘く噛んで、自分の作業に戻る。今みたいに、無愛想なカリンに対して、店に来るお客たちはなにかと、さういって言葉をかけてくる。さう言われる度にカリンは少しだけ居心地が悪くなる。それは、小さい子どもに対して「親のお手伝い」ができてエライね」と言っているのと近いニュアンスで、

スを感じてからで、感じてカリンは「私も二十八なんだと」と思ったりもする。

さういっているうちに流れていたレコードが終わる。ターンテーブルにはアル・ハイグのレコードがのっている。レコードを替えるために動かさないとする父親に対して、「いい、私やるから」と言いつつ、カリンは動き出す。

アル・ハイグのレコードを、ジャケットに戻し、レコード棚を見る。今のカリンは、楽器が主体の音楽を、あまり聴きたくない気分だった。とくにピアノトリオなんかは。エラ・フィッツジェラルドとジョー・パスが二人だけでやっているレコードを取り出し、針を落とす。持場に戻り、窓ガラス越しに外を見ると、雨が降つていて、いつもよりあたりは薄暗く、店の中のオレンジ色に光る電球が、どこかレコードから流れる温かみのある音楽と通じている気がする。反射する電球の光が、深煎りのコーヒーの上に浮いていて、そのコーヒーをひきたてるスパイスのように、控え目で、けれどもしっかりと「自分の声」を持った二人が織りなすレコードの音楽が、空間のすみずみまで行き届いている。さういって、時間の流れがぐんとスロウに感じられる瞬間が、カリンは好きだった。

「あー。なんか、やっと落ち着ける気がする」と思いつつ、カリンは、自分の体に入っていた余計な力が抜けたのを知った。自分の好きな空間の中にあつて、ようやく、自分の緊張状態をつくりだしていたのが何だったのかについて、ぼんやりとだが、思いを巡らせる。

最初に頭の中に浮かんだのは、源原ルルのピアノの音色だった。カリンはルルがピアノを弾く姿よりも先に彼女の音の方を思う。「柔らかなが、けつしてソフトではなく、その中にちゃんと芯があり、高音域にいくほどに、音は少しづつ官能的になってゆく」。カリンはルルの音さ。さういって風にとらえていた。

思えば、ルルは大学に入った当初から、さういって音を持っていた。彼女は、自分の好きな分野で、すでに「自分の声」を得ていた。あとはその声を使って、「何を話すか」でしかない。

自分の声、を持っていること。それがカリンが考えるジャズプレイヤーの条件だった。彼女はそれを父親から教わった。別にカリンの父親は、頑固でめんどうくさいジャズおやじではない。もとは出版業界に勤めていた人で、人間関係が煩わしくなったのか、それとも単にコーヒーとジャズの日々を過ごしたかったのか、真意の程は分かりかねるが、三十代半ばにして、彼は出版業界を離れ、妻の実家の持つ土地が余っているというので、そこを譲り受けて、住居と一体となった「源コーヒー」を建てた。

丸メガネをかけた穏やかな父親の顔に、苦勞の影はない。そんなはずはないけれども、カリンにはさうは見えない。例えば、一枚のレコードが終わる、カリンの父親が棚からレコードを取って、次のレコードに針を落とす。さうして、常連の誰かが「お、ビル・チャップマン

神奈川文芸賞 [2024]

現代詩部門：準大賞

引き出しのなかの江の島 / 国広知恵子

江の島に向かう江ノ電の窓の形に四角く縁取られた列車から見る海は...

大崎清夏 講評

江ノ電の四角い窓が学習機の引き出しの四角を呼びさし、それをきっかけとして思い出の中の海を引き出して...

か？「いいね」と言っ。それを聞くと、カリンの父親は静かにうなずき、「彼は、声があるからね」とだけ、言う。

「彼には、声があるからね」とだけ、言う。カリンはそういって、幼い頃から何回も見てきた。彼女は外で遊びまわるといふよりも、はなへ学校の図書室で借りた本を、喫茶店のすみの方で静かに読むのが好きだった。

「自分の方へ進める。進めてから改めて、自分の声」と言っ。自分の方へ進める。進めてから改めて、自分の声。自分の方へ進める。進めてから改めて、自分の声。

「日」に八時間は練習している。「二十時間は楽器に触っている。大学にいる人間から、そういう話を聞くと、カリンは心の中で眉間を寄せて、「なんだ、そんなに長い時間練習できるわけ？」と、思った。

「その「11」を見て、カリンはなんとなく金魚のフンをイメージした。自分が金魚のフンになって、水槽の中でゆらゆらと金魚にひっついていく。「金魚には強い意志があるように感じられる。私はいつか、金魚を離れて、水槽の底でひっそり世界に忘れ去られるんだ」と思う。

「あ、今日のアッコール、ミステイ、だから。よろしく。港が見渡せるカフェのテラス席で、ランチの入り口で指をひっかけたまま、ルルは言った。「は？」と不機嫌そうにカリンは反応する。

講評 楠木麻子

ともすると読者から反感をくらいかねない、文化資本に非常にめぐまれたカリンが、ジャズプレイヤーとしての核のようなものにそっと触れるまでを、これだけ寄り添って、なおかつ現代的な感覚をもって描けることに驚嘆します。